# 書　評

**藤田佳久著：『東亜同文書院**
**中国大調査旅行の研究』**

愛知大学文学会叢書Ⅴ
大明堂　2000年３月刊
Ａ5判　349頁　4,200円

評者の自宅の書架に，40年ほど前，大学院生であった頃にたまたま古書店で購入した１冊の『支那省別全誌』（第14巻　福建省）がある。1920（大正９）年に東亜同文会によって刊行された1,126頁もの大冊である。中国の省ごとに１冊を当て，全18巻より成るシリーズのうちの１冊である。後にその改訂版である『新修支那省別全誌』全９巻が刊行されたが，終戦により途中で中絶した。内容を見ると，省内各地の農林業の生産，鉱工業，商業の状況，交通などが諸統計とともに工場名，商店名，さらに流通経路や商習慣を含めて極めて具体的に記述されていた。これらは当時の中国に関する最も詳しい経済地誌であり，これが当時上海にあった東亜同文書院の学生が行ってきた毎年の卒業実地研修報告を資料として作られたことを知って評者は驚嘆した（何期生の調査によるものかが本文内に注記されている）。このことは東亜同文会幹事長小川平吉による序文の中にも簡潔に述べられている。

上海東亜同文書院ノ創立ハ明治三十三年ニ在リ今ニ至ル迄年ヲ閲スルコト十有八載其間我国各府県ヨリ俊秀ヲ選抜シテ上海ニ送リ薫陶教育シタル者既ニ一千二垂ントス而シテ毎歳春秋ノ候学生ノ将サニ卒業セントスル者ヲ支那全土ニ派遣シテ其形勢ヲ調査考察セシメ山川城邑人情風俗ヨリ物資ノ豊凶交通ノ便否ニ至ル迄細大漏ラス所ナク北ハ黄河ヲ踰エテ陰山ヲ渡リ西ハ秦蜀峨眉ノ峯ヲ攀チ南ハ滇粤苗猺ノ野ヲ踏ミ勇往邁進櫛風沐雨足跡殆ト全省ニ偏ク報告ノ稿本積ンテ二十万頁ノ多キニ達ス本書ハ実ニ此ノ稿ノ要ヲ提出シ新ヲ加ヘ修訂シタル所ニ係ル

評者は日本の近代地理学史に関心を持ち，勤務する大学でも長年「地理学発達史」を講義してきたが，この東亜同文書院の中国調査については，戦前の日本人が組織的に行った数少ない海外地域調査として興味を抱き，講義のなかでもその意義について触れてきた。このほどこれに関する藤田さんの研究がまとめられて，その全容に接し，日本の近代地理学史に大きな貢献がなされたことを喜びたい。東亜同文書院は，終戦後日本に引き揚げて愛知県豊橋に本部を置く愛知大学に再編成されたが，中国で行ったこの一大地域調査が従来必ずしも正当に評価はされていなかったからである。

本書は愛知大学文学会叢書の第５冊であるが，著者はすでに現在の愛知大学に残された膨大な地域調査の日誌，報告書―著者によれば，「体を張った汗と泥だらけの，しかも危険ととなりあわせのアドベンチャー的旅行の内容」―を資料として，第１～４冊をまとめている。そして本書において，この大調査旅行の実施契機とその全体像を明らかにしようと試みるのである。

本書は「はじめに」と「おわりに」を別にすると，次のような構成である。

第１章　「幻」ではない東亜同文書院と中国研究
第２章　『蘭州紀要』に寄せて
第３章　波多野養作の西域踏査旅行について
第４章　波多野養作の「西域地方事情」ノート
第５章　中国・福建省ルートを追う
第６章　調査旅行日誌から内陸三省の地域像を描く
第７章　東亜同文書院学生の中国調査旅行とコースについて

第１章は当初から中国研究を目的として創立された東亜同文書院の略史であり，卒業生による中国調査旅行の開始と発展などが紹介される。第２章は東亜同文書院の設立に先立って行われた最初の中国調査報告書ともいうべき『蘭州紀要』（1888年）を，第３，４章では書院の第２回卒業生であった波多野養作の『西域地方事情』（1905～06年）をそれぞれ取り上げ，後年実施されることになる東亜同文書院の調査の原型を見出そうとしている。

第５章では24期生が1926年に行った福州～厦門間のルート踏破の記録を取り上げ，著者自身が1986年に体験したほぼ同様のコースの観察と比較しながら，この地域の当時の土地利用や地方都市の市場圏などが現代中国の基本的経済システムに

なお生きていることを述べる。第6章は1930年，27期生の実施した四川，陝西，山西3省での調査日誌を取り上げ，各地の軍閥間の抗争の激しいなかで，卒業生たちが現地の地域の特性をどのように捉えたかを説明する。

第7章では調査旅行が本格化した第5期生，1907年以降の調査コース，調査指導方針などがまとめられる。中国側の協力を得て（必要な場合には出先の官庁や軍閥から護衛兵がつけられている）ほとんど中国全土にわたって実施された調査旅行も1931年の満州事変によって，その翌年から中国政府の護照（ビザ）が発給されなくなり，日本軍の勢力下にある地域の調査に限定されるようになる。指導者も経済地理学志向の馬場鍬太郎から地政学的立場に立つ小竹文夫に変わり，さらに1941年の専門学校から大学への昇格とともに個々のゼミナールの指導教授が独自の立場で分担指導するようになるなど指導方針にも変更があった。著者はこの間の変化を，模索期，拡大期，円熟期，制約期，消滅期の5つの時期に分けてそれぞれの時代の性格をまとめている。

このように，著者は，現在の愛知大学の所蔵されている東亜同文書院生たちの報告書と旅行日誌を検討して，第二次大戦前の日本では数少ない，組織的な地域調査の全容を本書において明らかにしているのである。著者はこれらの調査旅行について「若く純粋な学生たちの目は，眼前に生起する事象を，観念的でなく新鮮な感覚で把握する。そこには記録者個人の主観が十分入りこんでいるが，この場合，それゆえにより一層記録内容に意味を生ずることになる。また，記録者が単なる旅行者というのでなく，日本人であることから，日本人の視点とフィルターによって中国社会を認識し，把握しようとした点も重要である。当時の日本人の中国に対する視点を随所に見出すことができる。」，「特定の町や村だけではなく，広域を踏査することによって，コースに係わる地域全体を認識し，記録したという点も重要である。地域全体のイメージを把握でき，その中で個々の地域や事象を位置づけることが可能になるからである。」（ともにp.240）と評している。また，学生たちの調査によって明らかにされた当時の「歴史的に形成されてきた伝統的空間の枠組みは，将来において交通体系が大幅に整備されるまでは，ほとんど変化しないであろう」とし，今日もなお見られるように，「地域経済のベースは，無数のそれも狭小な局地的市場圏の並列から構成されているのであり，それを無視した経済政策は今後もうまく機能しないであろう」（p.241）としている。それは四川盆地や漢中盆地のような中国内陸部における評者の貧しい旅行体験からも首肯できる部分が多く見られるものの，一方ではこれらの地域内である程度まで整備された交通路上の交通量は着実に増加している。急ピッチで進められた内陸部の鉄道建設と線路容量の限界に近い状態で運転されている貨物列車，あるいは一般道路上での定量をはるかに超過した過搭載のトラックや個人営業のマイクロバスなどのひんぱんな運行など，戦前には決して見られなかったであろう現代の交通景観を見ると，現代の中国において，人々の行動範囲や商品の流れが飛躍的に拡大しつつあるのも確かである。そしてこのような交通の発達が長期にわたって続くならば，そこに住む人々の考え方と社会の仕組みを着実に変えてゆくに違いない。国が広く，人口も大きいだけに，変化が個々の地域の末端にまで及ぶにはいささか時間がかかるであろうことも確かなのであるが。

東亜同文書院による長期にわたる中国調査旅行とその成果の出版は，近代日本の地理学史のなかでも特筆すべき事象であり，その全容に迫った著者の長年にわたる研究の努力には深い敬意を捧げたい。著者は愛知大学に所蔵されている東亜同文書院卒業生による調査日誌や報告書などを資料として，更なる分析を続けており，多くの成果が今後発表されて，その実態がますます精緻に，かつ多角的，総合的に解明されることを期待したい。

（青木栄一）

**溝口常俊著：『日本近世・近代の畑作地域史研究』**

名古屋大学出版会　2002年12月

A5判　本文391頁

索引・図表一覧・付表49頁　6,500円

本書の著者は，水田中心史観を批判する立場から，近世以降の畑作地域の実証研究を四半世紀にわたって行ってきた人である。本書はその成果を整理して一冊にまとめただけでなく，水田中心史観批判からもう一歩進んだ著者の今の研究視点を世に問い，その成果の一端を示すために刊行され